

山本健吉編

最新俳句歲時記

夏

文藝春秋刊

1100円

最新俳句歳時記 夏

昭和四十六年六月一日 第一刷
昭和五十四年四月十五日 第十三刷

編著者 山本健吉

発行者 桜原雅春

発行所 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
郵便番号一〇二

印刷 精興社

製本 矢嶋製本

製函 加藤製函

万一落丁乱丁の時はおとりかえいたします

© KENKICHI YAMAMOTO

Printed in Japan

編纂の方針

一、本書は春の部・夏の部・秋の部・冬の部・新年の部の五冊をもって完結する。

一、四季各冊は、従来是时候・天文・地理・人事・宗教・動物・植物という分類法、あるいはそれに類似の分類法を廃し、三月にわたるものと初・仲・晩との四部門に分けた。それは従来の分類法における初春の季語と晩春の季語とを、無差別に春の季語として並列するような曖昧さを避けたからである。ただし、二月にわたるものは、それぞれの場合の判断に従った。

一、季語の分類は次の原則による。

春 立春（二月四日）から立夏の前日（五月五日）まで
夏 立夏（五月六日）から立秋の前日（八月七日）まで
秋 立秋（八月八日）から立冬の前日（十一月六日）まで
冬 立冬（十一月七日）から立春の前日（二月三日）まで

この原則を立てることによって、本書では、たとえば「メーデー」（五月一日）と「八十八夜」（五月二、三日）とは、ともに晩春の季語となる。従来は歳時記は、「メーデー」を夏とし、「八十八夜」を春とするような愚かしい分類をやっていたのである。ただし「子供の日」（五月五日）は、端午の関係から初夏に分類しておいた。

一、各季の初・仲・晩の分類は、つぎの原則に従った。

初春（陽二月・陰一月） 立春（二月四日）から
啓蟄（陽二月・陰一月） 啓蟄（三月五日）まで
仲春（陽三月・陰二月） 啓蟄（三月六日）から
清明（陽三月・陰三月） 清明（四月五日）まで
晩春（陽四月・陰三月） 清明（四月五日）から
立夏の前日（五月五日）まで

初夏（陽五月・陰四月） 立夏（五月六日）から
芒種ぼうしゅの前日（六月五日）まで

仲夏（陽六月・陰五月） 芒種（六月六日）から

小暑の前日（七月六日）まで

晩夏（陽七月・陰六月） 小暑（七月七日）から

立秋の前日（八月七日）まで

初秋（陽八月・陰七月） 立秋（八月八日）から

白露はくろの前日（九月七日）まで

仲秋（陽九月・陰八月） 白露（九月八日）から

寒露かんろの前日（十月七日）まで

晩秋（陽十月・陰九月） 寒露（十月八日）から

立冬の前日（十一月六日）まで

初冬（陽十一月・陰十月） 立冬（十一月七日）から

大雪たいせつの前日（十二月六日）まで

仲冬（陽十二月・陰十一月） 大雪（十二月七日）から

小寒の前日（一月四日）まで

晩冬（陽一月・陰十二月） 小寒（一月五日）から

立春の前日（二月三日）まで

ただし季節と年時とは正確に一致するわけではない。たとえば、「メーデー」が五月の行事であるのに晩春に分類されたり、「文化の日」が十一月の行事であるのに晩秋に分類されたりしているのは、それらがそれぞれ、立夏・立冬以前の行事だからである。

一、地方によって、陽暦で行なわれたり、陰暦（または月遅れ）で行なわれている行事は、分類上もっとも頭を悩ます問題である。たとえば「七夕たなばた」「盂蘭盆うらぼん」などは、東京では盛夏の季節を持つが、京阪地方ははじめ多くの地方では昔どおりの初秋の季節を持つ。本書では、それらは地方生活の上での季節の滲透度しんとうどの深さと、伝統的に担たっている行事の意味とを考えて初秋の部に入れた。同様の考えから、「雛祭ひなまつり」は晩春、「端午たんご」は仲夏に入れた。そのため、「雛祭」と「桃の花」、「端午」と「菖蒲いよちよ」、「七

夕」と「天あまの川がは」などが、別の季に分類されるという不合理は消滅する。ただし、灌仏（仏生会・花祭）は、東北地方などを除いて全国的に陽春四月の行事と化してしまった大勢に抗しがたく、古来卯月八日の行事として初夏の季を持っていたのを、今は桜花のさかりの行事として晩春の季に置かざるをえなかったのである。

一、新年の部を独立させたのは、都会地の大部分は新曆に従いながら、農村では依然として旧正月をやっていることから、新年行事を冬の部に入れても春の部に入れても、不合理なことが起るからである。たとえば、農村だけでしか行なわれない新年行事を、冬の部に入れることもできないし、都会で主として行なわれる新年行事を、春の部に入れるのも変である。だがその双方とも、新年季題として並列されることは、不自然ではない。そのことが、新年の部を独立させた最大の理由である。同様の理由で、冬の部には初・仲・晩のほかに、歳末の項を設けた。そこには明らかに歳末の意味を帯びた、たとえば「煤払」「年の市」「餅搗」「除夜」などの季語だけを集め、従ってそれは地域によってあるいは新曆十二月（仲冬）、あるいは旧曆十二月（晩冬）に行なわれる行事なのである。

一、三月にわたるものと初・仲・晩の四部門では、おおよそ時節・気象・暦日・山野・園芸・水沢・海洋・田園・行事・飲食・遊戯・雑などに分類したが、これは読者の検索の便をはかったもので、それらの項目は本文でなく、各ページの柱に示した。

一、「田植時」「葦あし野」「罌粟けし若葉」「芍薬しやくやくの芽」「鶯うの巢」などといったものは、季題として独立させる必要がなく、それぞれ「田植」「葦」「草若葉」「草の芽」「鳥の巢」などの季題に、傍題として含めておけば十分である。その点から、従来の歳時記に見られた季題の乱立を、できるだけ統合し集中する方針を立てたが、その原理を無制限に適用したわけではない。たとえば、「花」と「花見」、「月」と「月見」、「稲」と「稲刈」、「鷹たか」と「鷹狩」、「蝶」と「初蝶」などは、それぞれを独立した季題と

して立てている。要はそれらが独立季題（または季語）として堪える重さを持っているかどうかにかかっている。

一、季題・季語は一、二の例外はあるが、日本本土の季節現象を選んだ。また、現在すでにうち絶えた行事の多くは、廃題として整理した。もともと作句例がこれまでも現在でも見られる「絵踏」「寒食」「曲水」「菓喰」などの季題は、残しておいた。「亀鳴く」「蚯蚓鳴く」「鰯魚を祭る」などの空想的季題も、作句されているかぎり残した。

一、山・野・川・池・沼・湖・海・潮・波・水・田・畑などの地理上の名目、あるいは暁・朝・昼・夕・宵・夜などの時間上の名目に、四季の言葉冠して、「春の水」「秋の朝」などの季題がやたらに立てられているが、これも季題として妥当と思われるもの、例句が数多く作られているものだけに整理した。「春の水」が季題として妥当性を持っているからといって、「夏の水」「秋の水」などが、すべて妥当であるという理由にはならない。また「春の日」「秋の日」などは、従来分類上の必要から、時候と天文とに重出しているが、本書ではその必要を認めなかった。また二十四気は暦の上で、季節の移り変りのポイントをなすものだから、すべて季題として採用したが、七十二候になると、あまりにこまかく区分され、日本の季節の実情にそぐわない面もあるので、少数（たとえば「魚氷に上る」「鰯魚を祭る」など）を除いて、採用しなかった。だが、新年の部の付録に、二十四気、七十二候表をつける。

一、年中行事は生活に関係の深いものに重点を置き、神社の祭礼などは、古来著名のもの、印象の強いものに重点を置いた。忌日は、現実には修忌のことがあるもの（利休忌・蓮如忌・大石忌など）を主とし、それにたとえ特定の行事が行なわれていなくても、季節としての趣きの深いもの（業平忌・西行忌・蟬丸忌など）を加えた。忌日は、歳時記では無制限に膨張しうる部分であって、「チエーホフ忌」「ニーチエ忌」にまで及べば、古今東西の有名な忌日はすべて包含しなければならなくなる。そのような煩雑さは、本書では取らなかった。ただし、そのかわ

りに、新年の部の付録に、著名な人の「忌日表」をつけることにした。

一、解説は平易・簡潔・正確をむねとした。作句者の便宜をも顧慮して、季題の左側に歴史的かなづかいをルビで示した。ただし漢字の音は、これを除く。たとえば「光悦忌」はとくに左側に「くわうえつき」と示さない。

一、解説の文のなかに、ゴシック活字で示したものは傍題ならびに異名・種類である。傍題・異名・種類はできるだけ多くを網羅した。(参照)として示したものは、その季題と関連を持つ他の季題を示したものである。

一、例句は古句より現代にわたり、ことに現代のものを多く挙げた。採用標準は、例句として妥当なものであることを原則とし、またできるだけ多くの流派の句にわたることを心がけた。だが適当な例句が見つからなかった場合、かならずしもこの標準に厳密に従ったとは言えないものもある。例句は原作を尊重して、新かなづかいによらなかつた。例句のない季題・季語も、当然例句が現われるべきことを予期して、あえて掲げた。

一、各巻に、目次のほかに、五十音順の索引をつけたが、新年の部には、全巻にわたっての季題ならびに主要な傍題・異名の総索引をつけることにした。

目次

編纂の方針	一
三夏	元
初夏	一奎
仲夏	二毛
晩夏	三元
音順索引	三三
あとがき	四六

三夏

時節

夏	三
夏の色	三
暑し	三
涼し	三
夏の日	三
夏の朝	三
夏の夜	三
短夜 みじか	三
夏の空	三
夏の月	三
気象	三
夏の雲	三
綿帽子雲	三

雲の峰	三
夏の風	三
薫風 くんふう	三
青嵐 あおあらし	三
南風 みな風	三
はえ	三
まじ	三
くだり	三
ひかた	三
あいの風	三
やませ	三
だし	三
熱波 あつぱ	三
夏の雨	三
青時雨 あおしぐれ	三
夕立	三
雷 ひよう	三
虹	三
夏の露	三
山野	三
夏の山	三
夏富士	三
夏野	三
青葉	三
茂	三

萬 ばん 緑 りく	夏 なつ 木 き 立 た	結 むす 葉 は	病 やまひ 葉 は	木 き 下 した 閣 かく	夏 なつ 草 くさ	青 あお 芝 しば	梧 あお 桐 きり	青 あお 蔦 つた	滴 した り	清 きよ 水 みづ	泉 いづみ	瀧 たき	鹿 か の子 こ	麗 うつく 鼠 ねずみ	蝙 へん 蝠 ふ	照 てい 射 し	老 おい 鷲 じう	時 とき 鳥 とり	郭 かく 公 こう	簡 かん 鳥 とり	十 じゅう 一 いち	佛 ぶつ 法 ぽう 僧 そう	桑 い 鴈 がん	蒿 あや 雀 せき	野 の 鴉 えい	頬 ほ 赤 あか	戴 たい 雨 あめ	便 べん 追 お	大 だい 瑠 る 璃 り	小 しょう 瑠 る 璃 り	黃 わう 鸚 ひん 鵒 どく
望	望	望	望	望	望	哭	哭	哭	望	望	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭

鮫 さめ 鰯 いわし	野 の 鷄 けい	瑠 る 璃 り 鷄 けい	赤 あか 腹 はら	眉 まゆ 白 しろ	黑 くろ 鷄 けい	虎 こ 鷄 けい	夜 よ 鷄 けい	駒 こま 鳥 とり	岩 いわ 燕 えん	岩 いわ 鷄 けい	茅 かや 潛 くぐり	眼 め 細 こ	仙 せん 臺 だい 蟲 ちゅう 喰 く	星 せい 鴉 えい	眼 め 白 しろ	四十 しじゅう 雀 せき	五十 ごじゅう 雀 せき	山 さん 雀 せき	日 にち 雀 せき	小 しょう 雀 せき	青 あお 鳩 こう	雷 らい 鳴 なり	青 あお 葉 は 木 き 苑 えん	山 さん 椒 けい 喰 く	三 さん 光 こう 鳥 とり	雪 ゆき 加 か	夏 なつ 燕 えん	燕 えん の子 こ	鴉 えい の子 こ	麥 むぎ 鷄 けい	
毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛

[illegible]

鰯 いわし	源五郎鮒 げんごろうぶ	川鱒 かわます	虹鱒 にじます	姫鱒 ひめます	岩魚 いわな	山女 やまめ	鮎 あや	蛇籠編む へびかごあむ	魚 いさな	夜振 よぶり	川狩 かわかり	鵜飼 うかい	水鳥の巢 みづとり	輕鳧 かろがも	鴨の子 かもこ	通し鴨 とほし鴨	鴨涼し 鴨しずし	鴛鴦涼し うんおうしずし	鸕 う	水 みづ	覺 け	溝五位 みぞご	笹五位 ささご	葭五位 やがご	青鷺 あおざ	葭切 やぎり	翡翠 ひすい	夏の川 なつがは	水沢 みづさわ	ベゴニヤ
八	八	八	八	九	九	九	七	七	六	六	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	六	六	六	六	六

蒲 がも	眞菰 まこも	草葎 くさな	青蘆 あおあし	水草の花 みづくさ	蛭 むし	子 こ	子 こ	松藻蟲 しょうそうむし	風船蟲 ふうせんむし	源五郎 げんごろう	田龜 でかめ	水馬 みづうま	鼓 つづみ	蝶 ちょう	山椒魚 さんしょうぎょ	河鹿 かしか	川蜻蛉 かわとんぼ	龜の子 かめこ	綺泥鰌 きどろこ	鬪魚 いくさぎょ	熱帶魚 ねつたいぎょ	目高 めだか	緋鯉 ひこい	金魚 きんぎょ	蜆 かきがら	手長蝦 てながえび	鰻 うなぎ	だば鰻 だばうなぎ	鮎もどき あやもどき	鉅 こほり	やまべ
二	二	二	二	二	二	二	二	九	九	九	八	八	八	七	七	六	六	六	六	五	五	四	四	三	三	三	三	三	三	三	二

辣玉刈夏パ蔓夏夏夏田	韭葱葱葱葱菜菜燕根	菲葱葱葱葱菜菜燕根	草刈	田園	スキンダイビング	ヨット	モーターボート	ボート	波乗	箱眼鏡	砂日傘	海濱着	海水着	水上スキー	スカール	ダイビング	水球	ブル	泳ぎ
二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四	二四

干河豚	新節	生節	水貝	洗膾	沖膾	船生洲	鮓	夏料理	伽羅路	冷汁	冷奴	冷素麵	冷麥	飯饅	干飯	麥酒	甘酒	焼酎	冷酒	風爐茶	朝茶の湯	飲食	峰入	夏花	夏書	安居	祭	行事	瓜蠅
二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五

晒鯨	一五	皮鯨	一五	鹽鳥賊	一五	泥鰯鍋	一五	清涼飲料水	一五	氷菓	一五	氷水	一五	アイスコーヒー	一五	砂糖水	一五	葛水	一五	麥湯	一五	飴湯	一五	心太	一五	白玉	一五	茹小豆	一五	蜜豆	一五	葛餅	一五	葛饅頭	一五	葛練	一五	葛素麵	一五	水羊羹	一五	金玉糖	一五	淡雪羹	一五	ゼリー	一五	夏衣	一五	夏服	一五	夏合羽	一五	浴衣	一五	縮み布	一五
----	----	----	----	-----	----	-----	----	-------	----	----	----	----	----	---------	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	-----	----

生布	一五	晒布	一五	單衣	一五	夏羽織	一五	夏帶	一五	夏袴	一五	夏衿	一五	夏手袋	一五	夏足袋	一五	半ズボン	一五	夏シャツ	一五	開襟シャツ	一五	アロハシャツ	一五	衣紋竹	一五	すててこ	一五	腹當	一五	夏帽子	一五	夏蒲團	一五	夏座布團	一五	革布團	一五	敷紙	一五	圓座	一五	油團	一五	簞	一五	寢蓆	一五	著蓆	一五	編笠	一五	白靴	一五	日傘	一五	汗巾	一五	汗衫	一五	汗手貫	一五
----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	------	----	------	----	-------	----	--------	----	-----	----	------	----	----	----	-----	----	-----	----	------	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----

撒水車	打水	釣忍	風鈴	陶枕	籠枕	竹婦人	ハンモック	竹牀几	藤椅子	夏暖簾	葭簀	葭戸	網戸	緞障子	青簾	風通し	日除	露臺	バンガロー	サマーハウス	泉殿	夏爐	夏座敷	夏館	住	水玉	夜濯	髪洗う	掛香	香水
.....																														
一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六

蛾	ががんぼ	蛋取粉	蛋	紙帳	蚊帳	蚊遣火	蚊帳	蠅帳	蠅除	蠅叩	猩々蠅	蛆	蠅	外寝	晝寝	端居	氷室	冷藏庫	團扇	扇	扇風機	錫の鉢	ギヤマン	水盤	箱庭	稗蒔	縁蔭	木の枝拂う	晒井	噴井	噴水
.....																															
一四	一四	一四	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一六	一六	一六	一六	一六	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七

汗疹 あせな	汗 あせ	水中 みづの中	瘦冷 うすあつた	夏瘦 なつうす	跣足 はだし	天瓜粉 てんかふ	日燒 ひやう	雜	夏スキー	オープンカー	ナイター	船遊	箱釣	釣堀	夜店	立版古	走馬燈 そうまどう	浮人形	水中花 すいちゅうか	水からくり	水鐵砲	水遊び	草矢	草笛	遊戲	穀象 こくぞう	御器嚙 ごきそ	家婢 けあひ	南京蟲 なんきんちゅう
………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………
一五	一五	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一七	一七	一七	一七	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六

夏沸瘡 なつばし	夏風邪	水蟲	脚氣	マラリヤ	恙蟲病 きんぐさ	水寶 みづたから	定齋寶 じやうさい	毒消寶 どくしょう	初夏	時節	初夏	五月	卯月 うづき	夏めく	夏淺し はくしよ	薄暑	麥の秋	氣象	卯月曇	卯の花腐 くた	筍流 たけのこ	茅花流 ちばな	走梅雨 はしりづゆ	苗代寒 さむ	夏ぐれ	メイ・ストーム	
………	………	………	………	………	………	………	………	………		………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	
………	………	………	………	………	………	………	………	………		………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………
一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六		一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六

初夏